

う。篤とそれにて承れ。此度冠者太郎義綱。并に子息鶴喜代丸。退け且つ害せいと謀る事。則ち成就せば一味連判の聲は。其功の輕重に應じ。恩賞高祿宛行ふもの也。錦戸刑部太郎國純直勝とまで。地讀まぬ内二つになつて倒れ伏す。血刀引提げ飛鳥の如く奥の一間へ駈込めば。續いて松ヶ枝節之助ヲシ通さじものと追うて入る。堀原俄にあわて出し。貝田めが死物狂ひ殊に松ヶ枝無法者。彼奴があはれ出したらば我等はお座にたまられず。コレコレ武勇自慢の重忠殿。組留めてたべ頼み入ると膝もがた／＼。フシ盛ひひる。重忠は臨目もふらず。目驚き入りし貝田が手の内。伊達次郎明術が帯する所の刀諸共。速かに斬放せしは天晴名作。是こそは先達て紛失せしと略聞きたる。亂れ髪の一腰ならん。貝田がエミ明白に現はるゝ其上に。家の重寶出づる事。鶴

喜代の運目出たき所と。堀原戦を振る其中に座席崩さず悠々として坐しむる。寛仁大度ぞ。フシ見事なり。堀原獨も尻据らず。阿アレ／＼爰へ来るさうな。コリヤどう致さう重忠殿。コハ仰々し堀原殿。何の是しき仔細なし。終日の對決に拙者殆ど疲れ申す。氣を養ふは斯様の時。足下の手前で薄茶一服。一服やら立腹やら。切腹しようも知れぬ時宜。薄茶どころであらばこそ。折節風呂に火の氣は無し。爐の炭もつきかへすほんの是が冷火。堀原とのおあたりなされよと。尻に帆掛けて走り船堀原。フシはふ／＼逃げ出づる。貝田を中に熊川松ヶ枝。いづれ劣らぬ早業は目覺しかりける。三度次第なり。堀原川は薄手を負ひ。貝田を足下に節之助とゞめをぐつと刺通せば。庄司重忠喜悅の眉。阿ラ、出かしたり／＼。貝

田が帯せし一腰は亂れ髪の一腰ならん。系圖の一卷家の重寶かく一時に手に入る上は。錦戸刑部は遺流させ。家の榮えは萬々歳と。堀原に兩人勇み立ち祝ひ壽く池の龜千代の榮えを鶴喜代の。威勢は朝日の登るが如く實に神國の人心。頼もし／＼ともなかくに申す。ばかりは無かりける

天明五年己正月

作者

松高橋武兵衛
吉田角丸

傳兵衛 近頃河原達引

上之卷 祇園の段

地七重八重フシけふ九重に。匂ひぬる花の都の川東。祇園の社年ふりて和光の影もいちじるく。参り下向の人群集。咄し萬歳居合拔。えいとうく諸見物。フシげに繁昌の懸地なり。地ものゝふの身はいとどなほ難からめ。瀧口左内と聞えしは。龜山の勘定役人ひと心をおくじまの折目正しきフシ長羽織。地それには似ざる相役の横瀬官左衛門粉ふ方なき悪者づくり暫しは爰に立ち休らひ。何何と官左衛門殿。我が國元などと違うて繁華の地と申すものは。まあ賑やかな事ではござらぬか。さればく此度貴殿我等役用にてまかり出で。しばらく都住居。いつ来ても飽か

ぬ賑ひ。これを思へば田舎にぐづぐづ暮すといふは申さば面々の不仕合せ何と左内殿さは思さぬか。ア、其お詞御尤もにばござれども賢にも申す通り花は三吉野人は武士たとひ田舎にをるとても心に引けのあるべきや。いざ神前へと兩人は。オッリ打ちつれへてこそ行過ぐる。フシ一きは目立つ。風俗は。祇園の町に名も高き。其地おしゆんといへる戀知りが二世の誓を神かけて。フシ願ひは重く足軽く。仲居まじくら歩みくる。向ふの方よりすたくと。來かゝる男が目早くも。何テモアア妹よい所で行合うたな。ホ、ウ兄様與次郎様。よい所で逢ひました。案じらるゝはかゝ様の御病氣別にお變りもなにかいな。殊に目さへも不自由なお身。

嗚お前のお世話でござんせう。イヤモウ別に變りはないけれども。いつとてもぶらぶらとたゞ引立たぬ母じやの病氣。したが物を苦しやるな。追付けさつぱり本復さしやる。こちも今日は此邊へ用があつた故序ながらの祇園参り。又是から外へ寄つていぬる所もあれば。此頃ゆりと逢ひに行きませうさらばくと小短き羽織打ちふりフシ別れ行く。地氏よりも育ちにつるゝ人心フシ男ぶりさへ。常ならず。來かゝる井筒屋傳兵衛と。遠目に見ても焦るゝ人。それとおしゆんがさし招く。手に走り着き。そなたも今日は祇園参りと聞きたりしが。よい所で出くはした。マア氣を急いたは身請の事互に深いといふ事は。人に知られた二人が中。外へ遣つては此傳兵衛が男も立たずマア當分百兩ばかり手附をやつて。金の鎖で繫いで置く事を手代の万八と賺し合せ。大

方に手附の才覺。サイナ文でもしらす通り私を身請したがる客があるのと。ほんにもう氣の揉める事ばかり。地どんな出世の身になると、フッお前に別れ片時も生きながらへる心はない。いとしやきつう苦があるか。調このまあ色の悪い事わいな。地その苦もみんなわしゆぞ。こらへてくだんせこらへてと手をフシカ、リ取りかはし泣きくどく、フッ折から後へ。瀧口左内。それと知らする咳を。聞いてびつくり立ちのく傳兵衛。エ、コリヤ左内様。調爰へはまあ何時の間にと。地隠れもならぬ、シまじめ類。地左内も片類に苦笑ひ。見れば遊所の女中さうなが。密に用でもこゝは往來。人目に掛れば何のかの。社へ參詣あるならば早う〜と追立つる。詞に否とも云はれねば。おしゆんは別れ行き過ぐる。調ナニ傳兵衛お身にも兼て存じのとほり。拙者もと關東浪人漂

泊の内。僅かな好みに御親父喜左衛門殿の世話を以て。今の主取り龜山へあり付いて新參奉公。だん〜御前の首尾合よ。間もなく勘定頭仰せ付られ。恩願譜代の面々とも肩を並ぶる身の立身。これといふも龜山へ代々出入の喜左衛門殿の。世話下されしゆゑと恩を仇には存ぜぬ此瀧口左内。心にかゝる其方の身持放りしを幸ひに意見を加へ。心腹を矯め直さうとこれまで意見したは幾度か。したが若い時は誰しもある習ひ。とはいふものゝ見た所がよつぽど染みついた體たらく。得手勝手主義理づくに。無分別など出す時は。第一が親への不孝世間の人の評判許り。それ程の事辨へぬお身でもあるまい。ハテつまらぬ事は相談もしたがよい。此左内が恩を受けた井筒屋の息子

の身の上。聞き捨ててに致すべきかとく内へお行きやれさ。諸事は晚ほど。早く〜と立上る。地傳兵衛は忝なみだ。調お馴染とて御懇な度々の御意見。用ひませぬ不届をお叱りもなう事を分けての今のお詞。中々わるうは受けませぬ。有難う存じます殊にあなたが當お役におなりなされてより。諸色算用廉直にまかりなり。惣掛や仕入れ方取りわけて親共が悦び。此脇差の小柄迄も。殿様より拜領なしたる程の我々が身の首尾合。これと申すも皆あなた様の御高恩御執成し。さら〜徒らには思ひませぬ。ハテ其禮いふには及ばぬ〜身持を改めさへすればこの左内も嬉しい忝い。ちと又晚など身が旅宿へも来たがよいと。地心つく〜瀧口は。フッ宮居をさして別れ行く。地あと伏拜み傳兵衛は。涙のうちにもくどくどと。調他人の身でさへ目に餘つての意見親父様の心根をさぞとは知れど。勤め

の身にておしゆんが貞節。馴染むにつれて可愛さ増し。退くにのかれぬ二人が中。これも因果のひとつかと。身を悔みたる一人言。地後の方より官左衛門しづ／＼と出で来り。同ヤア傳兵衛待つてゐたと。地聲かけられて泣きがほ隠し。同これは／＼官左衛門様よい所へお出でなさりました。此間お頼みなされた鏝の儀。三百兩に付け人がある故。いよ／＼お拂ひなされますならば。追付け是へ。仲賣を手代万八が同道致して参る筈。それに付きちとお咄しと申すもマア御無心の筋委細は万八に。ヲ、サ委しく承知いたしてをる。随分三百兩なら拂ひ申さう。某も入用の金子なれど。平日懇意の其方の無心。否といふも何とやら氣の毒。當分百兩用立て申さう。それは近頃有難い仕合。イヤもうあなたもお手づかへなればこそ。大切な道具をお手放しなさるゝ

に。餘儀なき御無心申せしに。御得心あつて用事を足すといふも偏にお陸と。禮の八百三百兩の。金ふり拵げいきせきと仲賣勘藏同道して手代万八。同ヤアよい所に若旦那。幸ひ官左衛門様もお出なされてぢや。万八殿を伴うて参りました。ヲイノこちも見える時分と最前から待ち心。マア／＼此處へと居並ぶ茶見世。地傳兵衛は懐中より八櫛の鏝取出し。同コレ勘藏殿。こちの手代万八とは馴染さうなが。わしが逢うたは此中初めて。其折もいふ通り。出所の確なは。即ちあなたの御所持の鏝今御相對申して三百兩で手打つた。イヤもう家にこそよれ井筒屋の若旦那が世話ぢやもの。何の粗末のあるものか。サアこれ代金三百兩と地包渡せば万八もろとも。金改めて渡す鏝。互に引き換へ取りをさめ。同幸ひさる歴々の旦那衆が。乞ひ望まるゝ此鏝。買入のある内急に見せねばならぬ代物。其内お目にと地仲賣は。とつかは急ぎッ立歸る。地官左衛門は二百兩。懐中して立上り。同念のため百兩の預り手形。認めて置きやれ。身は一先づ行て来ると。地立別れ、ば此方の道へ。来るはたしか揚屋の六左。ヲ、い／＼と傳兵衛主従。招けば程なく六左衛門。同ホ、ウ傳兵衛様。このごろ内申します通り。おしゆん様を身請さうと。望みのお客が手附を御渡しなされうとあるゆゑに。則ち其お客が今日は爰へ見えてなれば。今相談に参りがけ。お笑止な事なれど。何を言うても皆金づく。イヤこれ六左。おしゆんと深い中といふは。人に知られた此傳兵衛。外へやつて立つべきか、時宜によつては生きては居ぬ。又死ぬるからは一人は死なぬ。ホ、ウそれ／＼。此万八が腰押しぢやないが。身請を取持つ六左衛門。一番疵にしやつぶり

と。ア、氣味たが悪いわいな。首筋元からぞつとするわいな。もししやつぶりと言はされては。マア好^あの酒も飲めぬわいな。もし又急にお前の方で。ホ、ウ身請せう。おしゆんが身請せう世話を頼む六左衛門。それ手附金百兩渡す。これで其方の談合は。イヤもう何がさて〜。お前が身請なされるれば。おしゆん様も悦び。私もしやつぶりを脱るゝ。何處も好しぢやと懐中より。地矢立取り出し、手附の證文。阿まづ此金をちつとも早く親方へ傳兵衛様お出を待つと。地金請取つて六左衛門活々として引つかへす。地跡へ横淵官左衛門。阿サア〜證文請取らう出来てあるか。ホンニなあはつたりと忘れてゐた。殊にこゝには判もなし。手形せうにも矢立の用意は。ア、これ若旦那。途中でそりや間に合はぬ。はて今六左衛門から請取つた手附證文。手形するまで

百兩の質物。ヲ、サ〜それで此場を取り計らひ。手形認め晩になりと引き換へに来たがよい。地然らば左様と件の一札手に渡せば。阿身は近邊の兩替屋で金改めて直に旅宿へ。地兩人共跡からと。ッ別れてこそは歸りける。地跡見送つて手代万八。阿官左衛門様のお蔭で。どうやらかうやらおしゆん様は繋ぎ留めたで。此万八までも大安堵。何とお嬉しうござりますか。イヤもう嬉しうなうて何とせう。是も皆そなたの働き。ハテお主の爲ぢやもの。働かいでよござりましょか。是からまだ跡金の工面じふめん。これも亦此万八が見んごと働き出してお目かけよ。ヲ、頼む、ッ頼むと悦ぶ折から。地息もすた〜六左衛門。大汗になつて駆け戻り。阿ア、お人柄に似合ひませぬ。お顔だけに沙汰はすまいがかうした金を人に掴まし。手附とは横道なと皆まで聞

かず。手代万八。阿ヤア何とお言やるおらが旦那に似合はぬの。横道のと名を立てて。手附の金に何言分。鹿怒な事ほざき出すと。その分には濟まさぬぞよこれお手代殿。濟ますの濟まさぬのとはそりや皆此方から言ふ事。今請取つた手附の金。往にがけに懇仲の兩替屋で改めさせれば。みな賢金。ヤアとびつくり包をほどき。見れば最前渡した金。阿さては仲賣勘藏めが。ほつかり一杯喰はしたか。悪い奴と氣もそゞろ。阿コレ〜万八。知りやる通り此間わが身が世話で。近付きになつたあの勘藏。そなたは馴染の事なれば。阿所も知つてゐやろ。引きすつて来て此譯をエ、申し。わしぢやて、馴染といふでもなしお前が直々つばめの相對。マアそれをわしがどうして知るものぞい。根が大枚の金を。粗末に取遣なざるからと取りあへませぬ顔付に。傳兵衛

は口惜しさ。駈出さんとする所コリヤ待
て傳兵衛勤くなくと。聲をかけて官左衛門。
コナ贖金遣ひの大騙り。大切な道具
の代金。此様な贖物を。授けようとし
をつたな。晝強盗の泥坊めと。地たぶさ
握んで引倒し。金の包を自鼻の間。打ち
付けく投付くる無法の打擲覚えなき身
も言譯なく。スエチ齒を喰ひしげる。無念
の涙。アホ、ウ無念でも口惜しくても。
手向ひならぬ身の邪曲。贖金をつかま
れ。秘蔵の鏝を騙られた上からは。旅宿
へ引きずりぶちはなすと。地引立つる手
をもぎ放し。ぐつと捻ぢ上げ突飛せば。
振りかへつてアア左内殿。御手前には
マア何時かこれへ。ア、イヤ先刻より
様子一々見聞いたした。フ、ムお聞きあ
つたら申さいでも知れた科人。引立つる
をなぞ留めさつしやるぞ。なぞ邪魔しめ
さるぞ。イヤ此瀧口が止めましたは貴殿

のお爲。ナ、何と。サアたとへ傳兵衛
衛まことの騙り贖金師にも致せ。左様の
吟味政道は。當地の御代官所よりあるべ
き事。何ぞや他國仕官の身を以て。いは
れざる吟味仕置。もし代官所より御察度
あらば言譯は何となさるゝぞ。サアその
儀は。如何にお急ぎなされたとて。魚忽
千萬。百兩の手形の出来るまで取り置か
れた手附證文。それなる男へお戻しな
されて。彼めを歸して遣はされい。そりや
なりませぬ。拙者が賣つた鏝代の三百兩。
誠の金請取るまでは此贖物。返す事存じ
もよらず。フ、ムコリヤ成程御尤。傳兵衛
いつぞや其方より借用した三百兩。只今
急度返済する。此金を鏝代に官左衛門殿
へ進ぜれば。贖金遣ひの名を免れるでは
ないかとサ、教へはせぬがともかく
もと。地取出し渡す三百兩。アイヤ申し
あなた様へ三百兩。御用立つた覚えは。

ハテさて物覚えの悪い男と。地目顔で知
らせ教へられ。はつと藏くありがた涙。
これ官左衛門様。仲實めにのめくると
騙り取られた八橋の鏝。贖金を取つたは
此傳兵衛が誤り。左内様の御蔭にて。三
百兩をまどひます。それ請取つて最前の
手附の證文お返しなされませ。フ、眞の
金請取るからは。戻してくれる。と證文
投出し。どう見ても仲實めと。背き合う
た手練事。其儀では済まされぬ吟味する
所で吟味させうと底意地わるき詞の針。
六左衛門は手附の一札。取りあげて引裂
きすて。ア、氣の毒な様子なれど。我等
風情の何と判断。どなたもこれと立上
る。左内は聲かけコリヤく揚屋ちと尋
ねたし事がある。おしゆんを身請せんと
いふ客の名が聞きたい。ハイ其お客はと
言はんとするをコリヤく六左衛門何を
うだくくと。喋らずと早く歸れ。こ

れはしたり官左衛門殿いらざるお世話。

コリヤ其客は何國の誰名は何と。サア其
お方は。どうも此處では申されませぬ。

ヲ、その管へ。サアもう何にも用はな
いちやつと去ねへ。ハテ其許にはいら
ぬお構ひイヤ何官左衛門殿我々國元を出

立の御遊所へ足ぶみ堅く停止と。御家老
中より殿しく仰せ渡されたは。貴殿にも

覚えてござらうがの。いかにもそれに又
かの者が名を。六左衛門とはどうして御

存じ。サアそれはアノ物でござる。ハテ
とぼけた顔めさつても遊所通ひは明白

白。ハレ滅相な左内殿。身はついにあの
者が所へ。入りこんだ覚えもなし。逢うた

もたつた今が初め。イヤサ言はるゝな。
初対面のあの者をたつた今六左衛門と。

彼が名を知つて呼ばるゝ管がない。此趣
を本國へ申し遣はせば其許の御身の上。

サアそこを朋輩の好みに。今日の所を聞

き通ひに仕り其代り傳兵衛が今日のしだ

ら此場限りに風聽御無用。ナンと御得心
か若し不得心なら。おしゆんが身請の客

の名までも詮議しぬいて。ア、い、いや
これ左内殿。何のまあ不得心。傳兵衛は固

より親喜左衛門は出入の町人。懸意の中。
何事も此座切りに。さらり。兎角か

やうな所に長居は。おそれお先へ参ると
云ひ捨てに。地立歸れば跡に揚屋も立場

なく。こちも長居はおそれあり。早うい
なうとこそと。我が家を指して急ぎ

行く。地苦り切つたる瀧口左内。イヤア
万八め。汝よう傳兵衛をそゝり上げたな。

此一卷詮議の仕様もあれど。科人も出來
且は諸方の掛り合ひ。何にも言はずに濟

してくれる。イヤ何傳兵衛。身も喜左衛
門に逢ひながら。同道して立歸らん。いざ

お行きやれと瀧口が。伴ひ歸る傳兵衛に。
地底氣味悪く万八も。グシ跡に付添ひ立歸

る。地道引きちがへうそと。來かゝ

の横瀧官左衛門。こなたよりも勘藏が。
ちらと見付けて立寄れば。万八も、ッッ走

りつき。今日には互に上首尾へ。シタガ
左内めがほくあげかけ。さて冷目。ヲ

ヲサ此官左衛門も氣を冷した。其代りに
はまんまと三百兩。冷いな目に逢はぬは

勘藏われひとり。イヤもう其代り。お前を
待合して。さつきにから其處らあたりを

ぶらへへ。サア八桶の鏝戻します。
ヲ、此方からも分口と。地百兩づつを二

人に渡し。飼さて身が當り前の百兩を。
おしゆんが手附に渡し。其内に金の工面。

是といふも皆万八その方の蔭。イヤ私も
勘藏も。お前の手先を働くは。分口の金

が欲しさ。シタガ左内めに穴を見られた
から。尻尾の出ぬうち突から直に駈落。

ヲ、サ此勘藏も當分は影をかくさにやな
るまいかい。何に付けても此百兩。ホ、

ウラまい〜と三人が地立別れ。てこそ
三重へ行く末は

揚屋の段

其許は主人鹽谷の讐を報ずる所存はない
か。氣も無い事〜。家國を渡す折柄。
城を枕に討死というたのは。御臺様への
追従。時に貴様が上へ對して朝敵同然と
其場をついと立つた。我等は跡に銃張つ
て居たはいかいたわけの。所で仕舞はつ
かす。御墓へ參つて切腹と。裏門からこ
そ〜〜今此安樂な楽しみも貴殿のお
蔭。昔の好み忘れぬ〜堅みを止めて碎
けをれ。いか様此九太夫も。昔思へば信
太の狐。化露して一献酌まうか。サア由
良殿。久しぶりだ御盃。また頂戴と會所
めくのか。さしをれ飲むわ。飲みをれさ
すわ。狂言のお邪魔ながら。官左衛門様
へ申上げます。御國元より御狀が参りま

した。何々國元よりの書狀とや。どれど
れ亭主はへ〜。フ、ムイヤもうこりや
何でもない見舞の狀。何事かと思うたに
家來どもも氣のつかぬ。爰まで持たせて
おこすに及ばぬ。はずみ切つた狂言の大
事な所で腰が折れた。地殘念至極とスエテ
拳を握れば。仲居藝子も氣の毒さ。同ホ
ンニもう御家來の不粹なから。いらぬ
狀おこして。大事な所で間が抜けたなう
おたよ殿おそめどん。サイナ官左衛門様
の由良之介はえらいもの。尾上梅幸そこ
退けぢや。ソレ〜大抵うまいこつちや
ないと。地笑ひを噛みて機嫌取り。イヤ
もうお相手になつた此久八敵ひませぬ。
今歌舞伎で双金を鳴らす。三五郎や十藏
に。お前の藝がやりたい。いらぬ所に藝
者がある。フ、ム豪いものであつたるが
の。今宵は身が思付きで。仲居交りのし
のぎ狂言。此あとが雙蝶々で。娘のお縫

が濡髪ぬれかみの長五郎。其間の狂言に我等が踊
に仕らう。サア〜何ぞ唄つてくれろ。
マアお一つ上つてさ。ワットこぼれるお
たつ殿替銃子。それ高調子で。オンフ立田
川では紅葉を流す。我は君ゆゑ浮名を流
す。イヨ〜やんや〜。どうだ〜。
きついものか〜。眞だあらうが〜。
ホンニもうまとも〜ホンマニ猿でござ
りますと、フ言ひ捨て逃ぐれば。同につ
くい仲居め料簡ならぬと荒れ出す。地亭
主は陰より手すりたひほう。久八も押し
め。同女子どもの仇口に。腹を立つとは
且那不粹々々。マア〜下に御出でなさ
りませ。そしてもうおしゆん様が見える
時分。ホ、ウ兎角きやつが事ぢや。揚詰
にしてくだけども。帯解かぬ情張者。こ
の横淵も精が盡きたれど。そこが意氣張。
是非とも傳兵衛と手を切らせ。女房にせ
にや顔が立たぬ。コリヤ六左かねて相談

して置いた。身請の手附百兩は。すなはち今宵渡さんと。持參致いてをる。肝心の狂言は。國の飛脚で間拔がする。踊は女子どもに半疊を打込まる。何とやら氣が減入つて面白ない。座敷をかへて酒にせう。ホンニそれ。いかう座敷がめいつて来た。サア。是から奥座敷。娘どもはどつちへ行たお縫お國と呼び立てて亭主は。フシ件ひ奥座敷。地勝手の方に氣の張らぬ酒も茶碗でお縫がほろ酔ひ機嫌。おたよどん一つ飲まんかい。またお縫さん酔はんすなえ。島田髷へみのかけて。髪も衣裳も出来であるに。狂言の腰が折れ。お前の濡髪の長五郎を見いで残念ぢやわいな。ホンニ大たぶさの前髪で。肩振つての身塵梅。艶退けて仕手は無いぞえ。又おたよどんのいらひぢやよ。ナアニお前をいらひては。何處ぞにあるぞいな。誓文わしや誰もない。おしゆん

さんにあやかつて。傳兵衛様のやうな面白い間でもありや好けれど。何言はんすお縫さん此おたよが取つてゐるわいな。ホンニもう此おしゆん様もなせ遅いこつちやぞえ。いつそお縫さん何ぞ彈かんか。アイ。何にせうな。道行にせうかいな。それよかろそんなら愛護の若ちや聞かんせと。地音メやさしく弾きなして歌へり逢ふことは。なほかた糸のよるとなく。晝とも分かぬ闇の内。枕ナホスひとつの。フシ床の海。地おしゆんは戀に面瘦せて。長地餘所の文句もわが身には。いとと思のまさりぐさ。おお縫さん今參じた。ホ、ウおしゆんさん二日酔といふ色ぢやぞえ。アイ二日酔やら三日やら。日さへろくに覺えぬ。ホ、ウ道理いなあの官左衛門づらが。お前のお出が遅いとて。喧しう吐しくさつてならぬわえ。そして奥座敷のお客が。お前と盃がしたい。ど

ろぢちよつとなりと。逢はしてくれとたつての頼み。お縫さんも一所にこちへと。おたよは二人を件ひて。入る奥座敷。フシ茶屋の繁昌奥口の。フシ取り締もなく忙しき。地折ふしおそめがとつかはと。おおみよどん。ホ、ウ何ぢやと。地勝手から。何ぢや所か。きり。ごんせいなる。大抵や大方。ひよんなこつちやわいなう。奥の客が。おしゆんさんを今宵中に身請するといふわいなう。ヤアサア。事ぢや。どうぞ傳兵衛様へ知らせたいものぢやが。イヤ。それ知らしたら。どんな事が出来ようも知れぬ。どうぞまあ間。久八どんに逢ひたいものぢや。あの久八どんは傳兵衛さんの大分恩になつた人ぢやといふ事ぢや。それゆゑ傳兵衛様の最良方。呼んでこうかと。地二人して。フシ思案かひなき女子同士。折から此方へ出る久八。地二人は見るより。

何して居さんぞ。サア〜ちよつと思案出して下さんせいなう。イヤもう。さつきから思案してゐれど。えい狂言の趣向はない。ヲ、しんきそんきそんなこつちや無いわいな。ドレ〜耳おさんせ斯うちや〜わいな。ヤアそいつは事ぢや〜。アノ官左めが身請の手附々と吐かしくさるに厭き果てたに。今宵中に身請するとは。ソリヤ事ぢや〜。太鼓持つが役なれば客の呼ぶ時はどのやうな座敷でも勤めねばならぬ故。官左衛門めとも附合うては居れど。この久八は何處までも傳兵衛の味方。こちはもと新町の割間。傳兵衛の大坂へ出てござる時。天満祭で喧嘩仕出し相手をあやめて。直に牢舎する所を。わしを傳兵衛様の引かしやつて。金出して抜うて下さつて。それから京まで連れてござつてきついで世話。大恩のある旦那なればどこま

でも世話せにやならぬ。イヤ〜もうそりや事ぢや〜。サアちやによつてえい思案料簡を。ちやつと〜。ア、其様に忙しういふと。出かゝる思案も引込んでしまふわいな。サアかうぢや。どうぢやいな。あるぞ〜こいつはどうであらう。どうぢや〜。たかゝあの客は此丹波屋の内の客。爰の亭主が吞込んで。相談の出来ぬ様に。ちや〜入れたらじやみさうな事。その亭主を抱込みやうは。ヲ、娘のお縫。娘のうちでの立者。きやつが吞込んだら。出来る事。すつと氣の掛けた通り者。頼んだら否とはいふまい。イエ〜そりや悪い。その思案悪い〜。おそめそりや何として。サイナアおみよどんは知らずか。あのお縫は傳兵衛さんと譯があるわいな。ヒヤアそれちやによつておしゆんさんの身請と聞いたら。ありや喜ぶであらうぞいな。言ひ

出して結句悪から。ハイしまうた。サアどうがなど。地三人が。上サハリ小首傾け智慧袋。フシ一度に絞る折も折。奥にはお縫が聲として。久八さん。用がある何處にぞい。アノ聲は娘のお縫。爰へ來ては話の邪魔。二人ともに此方へおぢやと。連れて一間へ入るあとへ。おしゆんは。しを〜立出でて。ステ心も浮かず氣もすまず。案じに胸をフシ痛めしが。互に變るな變らじと。言ひ交した言葉を反古にして。奥の客に受出され。傳兵衛さんへ濟むべきか。どうぞ逢ひたい知らせたいと。おしゆんは涙の獨言。逢瀬もせばし途絶えして。君ゆゑ心痛むなる。傳兵衛が内さし覗きつツと入る。ナウ傳兵衛さんか。逢ひたかつたと。ステ抱き付けば取つて突退け。イヤコレ古めかしいその身ぶり。此頃は官左衛門が揚話で。おれが事は忘れ果てくさつたら。あたふ

が悪い穢けがらはしいと。地仕掛ける口説くせ。地
おしゆんは顔を振り上げて。恨めしの
々、キお言葉や。なんの私わたしにつゆほども。
ナホスフシ外へ引かるゝ心は無い。地お前に
別れたその日より。揚げづめにする官左
衛門。地振つてゝ振りつけて。内へ戻
ればそのあとへ。茶屋からの附け届け。
親方様には叱られる。それも誰ゆゑお前
ゆゑあまりたよりが無いゆゑに。どうぞ
お顔を見るやうにと。地神さままでを
せびらかし無理な願もお前に逢ひたさ。
サハリ粹すぢな臺詞も打越して。愚痴になつた
も誰が業わざぞ。義理も恥辱ちじよくも外聞ぐわいぶんも。忘れ
果てゝも忘れぬお前。それを外氣ぐわいきもある
やうに。疑はしくはお前の手にかけて。
殺してやいのと膝の上。身を任せたるお
ぼこさは廓くわくに馴なれてもかはゆらし。傳兵
衛も心解け。阿ホ、ウ疑ひはれたもう泣
きやんな。地忍しや。日頃から憎いと思

うてゐる官左衛門めが揚詰やうぢで。一倍に氣
が揉めて。常から外心ぐわいしんの無いとは知りな
がら。腹立ち紛まれ。口へ出るまゝ言うた
のぢや。ホンニあの官左衛門めが。祇園
での三百兩も。てつきり言ひ合せた騙かたり
事。手代の万八めを吟味して。事のしだ
らを質たさうかと思へども。その場より彼
れも駆落かくだ。あの官左衛門めが外の者なら
仕様もあれど。何をいうても出入屋敷の
重役おもてん人。それ故に手出しもならず。残念無
念を胸を擦こつて堪へてゐる。ホ、ウ道理
いな尤ぢや。それ程ぬしの憎んでござん
す官左衛門。何しに従はう。帯解くもの
でござんす。急に話さにやならぬ事があ
る。マアこちへと手を引いて。地し
んき辛苦をわくせきと、フシ伴ひてこそ入
りにけり。奥から亭主が。阿おそめく
おそめは居ぬか。アイくくと。地勝
手から。阿旦那さん。奥にござるかおしゆ

ん様を身請なさるゝお客かえ。アイく
座敷が淋しいちやつと行きや。イヤ御亭
主それへ參つて御意得ませうと立出づ
る。地年も六十のフシ親父客。阿おしゆ
んくくと名を聞いて。焦あせれて来たこのお
やぢ。身請して連れて往ぬる氣。今宵中
に頼みます。あと金を宿やどもとへいうて遣
る間の手付け金と、フシ差出せば。阿ホ、
ウこちらにも先約があれど。今宵中とあ
るからは。あなたの方へ。首尾なるやう
に相對たいたいして參じましょと。立上れば此方
より。阿その身請まあ待つてもらひまし
よ。ソリヤマア誰ぢや。イヤわしでこん
すと。地聲をかけ娘のお縫が狂言仕立の
大前髪。道具ガリ肩から歩く。大綱の
サハリ桶小短き草履下駄強さうな顔。フシか
はゆらし。阿お縫こりや何ぢや。イ、エ
わしや縫ぢや無い。濡髪ぬかみの長五郎ぢや。
おしゆんが身請は此濡髪がさぬ。アイ。

ぐつと長五郎が邪魔するのでござんす。イヤこれ此方が身請して連れていぬるといふおしゆんに。何ゆゑ邪魔しめさるぞ。

サイナ身請を待つてもらひませうといふ譯は。あのおしゆんには傳兵衛というて深い間夫がござんす。それを又何してわしが世話やくと思はんしよが。其傳兵衛様にはわしもちつとした譯がござんす。

それぢやによつておしゆんさんと傳兵衛さんの中を裂きたがると思はれてはわしが女が立ちやんせぬ。金輪際世話やいておしゆんさんと添す氣。それ故男伊達の濡髪の長五郎になつて頼みます。こゝを聞分けて。親仁さん。マアその身請止めて下さんせ。頼みましたと。地立役の臺詞も所の、コシ徳ぞかし。おそめは手打ちあつばれ女子ぢや。富十郎が女伊達其處退げぢやと。コシいそ〜すれば。此方は仔細聞き届け。此親仁がよい年を

しての色狂ひと。一通りはをかくし思はしやるが。わしが身請せうといふも外の手へ渡すまいため。こなさんの其頼もしい心底を聞くからは。私が所存も打明けて話します。聞いて下され。わしは其傳兵衛が親でござるわいの。エ、ホ、ウ恥をいはねば理が聞えぬと。わしが出生は遠州濱松。だん〜と身上し纏れとう〜果は紙子の身の上。子供の時覺えた東北の曲舞を。誦うて立つた井筒屋の門口。先の喜左衛門様は慈悲深い生れ付。エエ悪うも育たぬ風體不便な事と呼込んで。こちが成立の話を聞き。讀み書き算用の出来るを取柄に引上げて手代格。エエ有難い奈い。どうぞして此恩をと商賣に憂き身を棄し。一つ飲んだ酒も止め。煙草は固より鼻紙は紙屑籠から取り遣ひ。足袋はかず頭巾きず。十八年が間惚嫁一つ買はとこそ。花の都に住みながら

芝居は何をするものやら。親方大事家業大事と精出したが御一家業の目に留り。先喜左衛門殿死去の後。此跡式を立てかねぬ其方と。家の娘にめあはされ。我が名も直に喜左衛門と改めて。大名高家のかげ屋とは成上つたるわしが果報。其後、傳兵衛を産み落したは女房といへど昔の主なり家筋と。心一杯抱したれど。十年以前につい往生。わが子ながらも傳兵衛は。此家の眞の血筋と。大事々々が餘つて甘く育てしが。親の眼を眩まして。多くの金を傾城買ひに遣ひ棄てる身持放埒。どうぞしたら直らうかと。心を痛め暮せしが。つく〜思案した上で。それ程あれが好いた者なら。おしゆんを請出し女房に持たせてやる。添はしてやる。マアどれほど染み付いた中か。様子を見るため親ながらよい年しての揚屋遣入。もし傾城は持たされぬなどと。選り

嫌ひして。心中事の世話になど作られるやうな無分別などした時は。井筒屋の血筋はとんと絶果つる。それが悲しいとまた不便が餘つてよりの急の身請。お縫女郎の道を立てよ。男伊達の鬚髪になつての頼もしい今の入譚。忝ならうござる。嬉しうござる。そんなら斯うしませう。此身請の一卷は。お縫どのに預けるから。お世話ながら突込んで世話やいて貰ひませう。是では道も立ちまじよがの。スリヤわたしが言葉を立て。身請の世話させて下さんすか。エ、忝ないと禮いふ場なれど。濡髪の長五郎が預りました請負うたぞえ。必ず今宵中にその身請を。ホ、ウ違はぬ證據おしゆん女郎をこゝへ呼んで下され。アイくく。地あひから様子を立聞かおしゆん。傳兵衛は親のお慈悲とありがた涙。おしゆんを連れて出る久八。御思ひがけない親旦那。ざつと掛け

た御取捌き。ホンニもう拜んで居やんすお縫さん。ヲ、わしや厭いのおしゆんさん。世話するは濡髪が役。これでわしも立ちやんした。ざつと臺詞が納つた。サアくはから奥へ行て酒にせう。ホンニほんに旦那さんさうぢやいな兎角浮世は色ぢやえ。地騒ぎにつれて打連れてオケリ入るやへ其夜もッレ後夜近く。地奥からそつと横瀧官左衛門。様子立聞きこなたへ出で。御あの喜左衛門めが。今夜中に。おしゆんを請出しをるとは。思ひがけない事。兎角こゝの亭主めも暫間の久八めも。傳兵衛が最良して身どもが詞は取合はぬ。いつそ親方を直に呼んで。逢ひたいと思へども。三百兩の身請の所へ。此百兩ばかりでは所詮埒の明かぬ事。國許へ言うてやる間もない急な事ゆゑ。金の才覺難儀至極。いつそおしゆんを人知れず。引つさらつて退くより外の思案はない。

地さうぢやくつぶやく所へ。地奥より此方へ出て来るおしゆん。物をも言はず官左衛門。じつと小脇にひん抱かへ駈出す。後へ久八がどつこい遣らぬと引戻せば。邪魔ひろぐなと踏飛す。足首とつて久八が。縁より下へッレ真逆様。地踏付けく踏みめされ。命からく官左衛門ッレ道ふく逃げて立歸る。地皆々此方へ走り出で。御アモよいさまよい氣味と。地笑ふ折から。走つて来る。手代十助。御唯今瀧口左内様より急の御使。トハ氣遣はしと喜左衛門。状態取上げ封押切つて讀み終り。お國許より急ぎの御用筋申し来る。急に談じたき筋あるによつて。只今旅宿まで来いとこの此文體。何御亭主身請の事を今夜中に埒明けてと思ひしに。今聞かるゝ通の譯なれば。私は是から直に御出入屋敷のお役人の許へいぬる程に。御用筋の濟み次第。こゝへ戻つて

明日は早々後金おこして埒明けましょ。傳兵衛は跡に残り何か相談極めて戻りやいの。皆の衆頼みます。そんならお歸りなされますか。おさらばさらばと聲々に。増仲居が見送る前垂のあかりを。ユリ照し三反出でて行く

中之巻 河原の段

地名に高き。四條河原も。冬ざれて。ホッソ川風寒く吹きすさび。往來も浪の石ばし。水音までも夜はなほ。いとしんくんとッ物凄く。曇る空より我が胸も。戀路にくらむ官左衛門。万八勘藏引連れて立止り。何でもおしゆんを引つさらつてと出かけた所。たいこ持の久八めに邪魔されて散々の仕合。すこくと戻る所汝等二人に行き逢うたこそ幸ひ。今夜中に請出して 喜左衛門めが連れて戻ると吐かしたおしゆん。この河原に待合はして。

面を隠して引つ擔げ。何處へなりとも退るな。ヲット合點ぢや吞み込んだ。もしく料簡。ホ、ウそれよごんす。何かなし邪魔する奴はしらども頼んで片付け。さにお前の段平。すばと引抜いて閃つかせす。我等にお任せ。ひと走り往て頼んで



たら。他の奴等駕籠を投つて逃げるは定。連れてこら。コリヤ出来た。そんならちそこで件を擔げて退くのぢや。万八ぬかつとも早いがい。増走れくに万八よ。

逸足出して驅り行く。かゝる工のありぞ

とは知らぬ井筒屋傳兵衛は。わが家へ戻る辻駕籠に。道を急がせ。マシさしかゝれば。地そりやこそ来たわと。ぬつと出で。

提灯ばつたり切り落せば。駕籠昇ども。

わつと驚き逃散つたり。コハ狼籍と駕籠より。飛んで出でたる。傳兵衛が顔見て

びつくり。ヤアわりや傳兵衛か。お前は横瀬官左衛門様。ヤアおのれは仲實勘藏め。よくも〜いつぞやは贖金を掴ましたな。汝に逢うて此詮議がしたかつたわ

い〜。ヤアそこな蚊蜻蛉め。假令目無けりやよけれ。大きな聲で吐かすなや

い。贖金の吟味がしたうても所詮わが手に合ふ此勘藏では無いわいやい。あた忌

忌しいと踏飛す。足首取つて拂ひのけ。心得がたきは官左衛門様。かゝる悪者を手に付けて。何ゆゑ此傳兵衛に狼籍をさせ給ふぞ。ホ、ウその仔細いうて聞か

ん。汝が親喜左衛門が身請して。連れ歸

るおしゆんを。待伏せして引つさらへ。擔げて退かんと最前から。待つて居た此官左衛門。駕籠に乗つたはおしゆんぞと。

思ひの外に傳兵衛サ、おしゆんは何

處へ片附けた。サ、それ吐かせ。吐かせ〜と嵩高なり。こなたは故と逆はず。イカニモおしゆんは。親どもが身請を。

今夜中に致して連歸るべき筈なりしが。御國より急の御用金申し来り。おしゆんが身請は明日と約諾致し置き。親ども儀

は瀧口様の御旅宿へ先刻参上。これによつて某事も。跡より只今参りがけ。瀧口

様もあなた様と御判談もなされたかろ早々御歸宅然るべし。身も親どもが待ち

かねべし。心急か候へば。御先へ参り候と言捨て立つを引き止め。何處へ〜。一寸も遣ることならぬ。スリヤ身請明日へ延びたとな。いま〜しい手苦

違つた今夜のしだら。汝に知られたから

は此儘では戻されぬ。マ、さうぢやさうぢや。そ奴を歸していけ口叩かれては。此方とらが身の破滅。いつそ旦那一思ひ

に。マ、サ〜この官左衛門も其料簡。イ

ヤ何傳兵衛。此横瀬官左衛門は。汝が出入屋敷の重役人。身が惚れたと聞かば。おしゆんと手を切り離れべき筈なるに。

親喜左衛門までが一つになり。身請して内へ引摺り込み。官左衛門に鼻あかせんとは。言語道斷憤き仕方。おのれといふ

色男がある故に。おしゆんめに振附けられた腹いせに。思ふ存分さいなんだ其後

で。息の根止めてこますのぢや。たとへじたばた騒いだとて。所詮埒の明かぬ事。汝が手に合ふ俺ぢやない。諦めて泥水喰

へと。地雨の溜りへとうと投げ。あた忌ま〜しいと鉄平足に。踏附け蹴飛ばシッさいなむにぞ。傳兵衛も齒ざしみ齒ざ

り。無念の胸撫でますり。同イヤ何官左衛門様。此傳兵衛は卑しい町人。蹴られても踏まれても苦しからねど。此脇差の小柄は、殿様より。拜領したる祐乗が作の三疋獅子。此小柄を。御家來の身として。土足に掛けても勿體なくもござりませぬか。ヤア置け〜いふな。たとへ以前は殿の物なりとも。おのれが手に渡つたからは。素町人の家の道具。踏んだとて蹴たとして。何の勿體ない物か。小柄ぐるみに。踏み躪つてさいなまん。ヲ、此勘藏は。元より小柄に掛合ない。おのれがやうな愚鈍な奴は。饅頭ぶみにしてこまさんと二人して。地踏むやら蹴るやら河原へ投げ付け踏付けられ。同エ、餘りといへば非義非道な官左衛門様。出入屋敷の重役人と。無念を堪へて手向ひせねば。附け上つたる非道の打擲。さほどおしゆんに執心ならば。夙くにも身請はなされ

いで。腹立つまゝのぶち打擲。武士に似合はぬなされ方。ホ、ウその金が出来るくらゐなら。賢金のぐら事騙はせぬわいやい。スリヤあの八橋の鏝の折。ヲ、是なる仲實勘藏。手代の万八と肌を合せ。三百兩物したのぢやわいやい。地さてこそさうと傳兵衛が。ヌエテ無念に無念重る思ひ。睨みつけたるはら〜涙官左衛門は。せ〜ら笑ひ。同ハ、ホ、ホ、ホ、口惜しいか大聲あけてとこ吠えろ。腹一はいさいなんだあとで息の根止めてやる。これが此世の泣納め泣け〜ほえろ。地大べらばうめと立ちかゝり。又踏みかゝれば。もう是迄と官左衛門が。肩先すつぱり切下ぐれば。勘藏は氣も狂亂。ヤレ切つたわと呼りながら。フシ一散にこそ逃げて行く。地深手ながらも官左衛門。抜合せて切付ければ。ちやうど受けとめ。切先鋭にちやう〜。危かりける有

様なり。痛手に堪へかね。官左衛門河原へどつさり倒るゝを。疊みかけて切りつければ。残念無念のうめき聲。のた打ち廻るをなぶり斬り。數ヶ所の傷に官左衛門。フシ狂死こそ心地よき。地をりから来る。人影に。既に自害と。傳兵衛が。覺悟の刀取直すを。ヤレ早まるまい傳兵衛様。マテ〜待つて下さんと聲かけられ。ヤアさういふは久八おしゆん。そなたの事を根に持つて。最前より官左衛門が非道の打擲。堪へるだけはとこらへしが。どうもかうもならぬ仕儀になり。胸に餘つて手にかけたれば。人殺しの此傳兵衛。すぐに此座で死ぬ覺悟。親人さまのお敷も。さぞかしと思ひはすれど。此期になつては詮なき繰言。不孝の段々よき様に詫してたもと。地又取直すを久八は押し止め。河原に喧嘩があると聞いた故。お前の事が心もとなく。おしゆん様諸共走つて

来た。人を殺せば死ぬるとは尤の事ながら。喜左衛門様や。是なるおしゆん様の。歎かしやる所をも思ひやつて。四邊に人の居ぬこそ幸ひ。早く此場を立退いて下され。サア落ちて下され。久八さんのいはんす通り。喧嘩と聞いて胸騒ぎ。かういふ仕儀もあらうかと。脱けて来たこのおしゆん。わたしが事から起つての人殺しの科何とせう。さういふ事なら死ぬる勢は道理ながら。親御様の歎きや。わたしが悲しさを推量して。どこの山奥。いづくの浦にも遁れるだけは逃げ隠れても。どうぞ死なずに下んせ。死ぬる事ならお前一人死なしはせぬ。わたしも共に死ぬ覚悟。地おまへを先立て。わしが身が一日生きてゐられうか。親孝行と氣を入れかへ。未練卑怯な心にも。こちつとは持つて下さんせと。ッ身を投伏して泣きわたる。同サア親への不孝やそなたの歎き。

思はぬにはあらざれど。人を殺して此傳兵衛。存へる所存はない。止めずと放して殺した。はてさて聞譯のない。お前の恩になつた此久八。悪い事いひはせぬ。たつた一人子のお前を。家の血筋と喜左衛門様の大切がり。後先見すの。不料簡も出ようかと。おしゆん様の身請なされるも。悲しい事のないためのお計ひ。そこをよう聞分けて。止まつて下さりまなせ。それ聞分けぬにもなけれども。そんなら落ちて下さりますか。それぢやて此死骸。ハテ跡は我等にお任せあれ。おしゆんさま此所に長居して。人目にかゝつては傳兵衛様の爲にならぬ。早う内へ戻らんせ。序に傳兵衛様。こつそりと送つてやらんせと。地言ふにおしゆんも心急き。同サア。傳兵衛さん。早う退いて下さんせ。もし死ないで叶はぬ其時は。わたしも一所に死出の旅。ハテサテ

おしゆん様。お前までがそんな事。千の萬のと言葉敷いうてゐるうち隙が入る。何をうじ。早うと地せき立てられて傳兵衛は。ッ心ならずも遁れ行く。地星の光に後影。見える間は延び上り。やれ嬉しやと始めて吐息。ッつく折かり。地向ふへ万八が。しらども引連れ走り寄る。かくと見るより恟し。無二無三に締めかゝるを。ひらりとかはして身縊ひ。同方人つれたる泥坊めら。久八が手並を見よと。地左右前後を相手どり。手を盡したる手練の働き。コリヤ叶はぬと万八はじめ。ッ遺ふ。遁れ逃げて行く。勘藏が訴へにや。所の代官捕手引具し。駆け來り。勢州龜山の御家來。横淵官左衛門を切り殺せしと。注進あつて召捕りに向うたり。尋常に繩かゝれと。地呼ばはる壁に久八が科をわが身に引きうけて。捕手の前にどつかと坐し。人を殺せ

ば覺悟の前。御苦勞ながらと手を廻せば。早くも掛けたる縛り繩。囚人引けハア

堀川の段

地同じ都も。世につれて。フシ田舎がましの。薄烟うすけむり。堀川邊ほりがわに住居して後家の操も立つ月日。琴三味線の指南屋も。合の手縫ぬいれ。氣縫きぬいれを。保養やすらひがてらの藥風呂。煽あおぐも我を甞團扇。フシ目さへ不自由な暮しなり。詞おつる様待遠にあらうなア。そして何やらのさらへであつた。ヲ、それ鳥部山。アリヤ地體心中事。會にでも弾はくのなら。お前は女子むすめの方。おしげ様は男の方。掛合に唄うたふがよいぞえ。ドレ／＼おしげ様の代りにわたしと掛合に唄ひませうと。地おいてひく手もしをらしき。二上り歌女肌には白無垢や。上に紫藤の紋。中著ちゆうぢやく緋紗綾ひさあやに黒襷子の帯。年は十七。初花はつはなの。合雨あまに葵あひまるゝ立姿たちま。男も肌

は白小袖にて。黒き輪子りんこに色淺黄裏。二色酒にいろしゆに。亂れて遊ぶ騒合さわあひひ。合あの面白おもしろさを見る時は。戀こひといふ字に身を捨すさを見る時は。詞イエ／＼しをれがない



小舟。どこへ取りつく島とでもなし。合二上り歌あの面白おもしろさを見る時は。あの面白おもしろさを見る時は。死しに行く身みの後のちのそなたと某たれが。去年こゝろの初秋はつあき七夕せちやの座

敷踊をかこつけて。忍び逢うた事思ひ出す。詞けふはマアそこまで精が出るほどあつて。きつう手も廻り出した。もうもろ何處で弾きなさつても。恥かしい事はないと。地聞いて笑顔の片男波。又明日といふしほに。ッシおつるは立つて歸りける。地母を大事と油断なき身すぎも輕き小風呂敷。肩に載せたる猿廻し。戻りはいつも日暮前。與次郎は息せき、ッシ門口から。詞母者人今戻つたぞや。ヲ、兄戻りやつたか。さぞひもじかる。茶も沸いてある。膳もそこにして置いた。ヲ、とくよ戻つたか。今朝から子猿めが親を尋ねて喧しい。ちやつと傍へやつてやりや。アイ、さうでござんしよとも。ソリマぢやつと乳を吞ましてやれ。イヤナウ與次郎。そなたが孝行にしてみたもるにつけ。わしがこの長々の病氣も。いつ本復する事であらうと思へば。疲れの上に猶

疲れる。僅な弟子衆の餘情や。わが身の働きで。この養生がなるものかと。地思へば薬も毒となり。母ではなうて子供の爲には。呵責の鬼と思はるゝ。鬼は冥途にあるものを。つれなの老の命やと。身を悔みたる咽び泣き。メエチ哀れにもまたいじらし。詞ア、コレ母じや人。ソリヤ何を言はんすぞいなう。其様にひそやかな身代ぢやと思はしやるか。地此間弟子入した米屋の息子殿から。永々おふくろの煩ひで嘸かし勝手も悪からうと言うて。雪か花かと申すやうな白米の仕送り。店店の旦那衆からは何なと用があるならば言うておこせ。もし出養生さしますなら幸ひな隠居所もあるほどにと言うてくるお方もあり。羊羹饅頭生魚。近所隣へさう、裾分もしられねば。鯛赤貝の類は横町の鮮屋へ卸賣。目モ案じる事は微塵もないぞや。それにまだ、氣の毒

なは。この家主が此家を居なりに買うてくれぬかと頼まれる。ヤレ厭やの。ア、あた世話な家持よりは金持が。遙かましでもあらうかと。母に案じを掛けさせぬ。嘘八百さへ一貫に足らぬ節季の言葉を。いふ下稽古や、これなるべし。地うそとは知れども老の身は子に従ふが習ひぞと。機嫌よげに頷き。詞ヲ、それ聞いて落付きました。が落付かぬは娘が事。此間も親方が。おしゆんを預けに來て言はしやるには。コレ傳兵衛殿といふ客の事で。ちと内に置かれぬ事がある。たとへ傳兵衛が尋ねてござんとも。おしゆんが歸つて居る事は。包み隠さねばならぬぞやとくれ、も言はしやつた。サアわしも其入諺を聞いた故。おしゆんが心根を思ひやり。思はず涙が。ドレマア。地火を點そと棚の隅。こて、取り出す行燈の。ッシ火影も漏るゝ暖簾ごし。おし

ゆんく。アイと返事もしをく。と。
本ッ思ひ惱みし顔容。地マアくこへ
と小聲になり。門の戸はかけてある。

見る人も聞く人も無い。方々で噂を聞くに。此間の川原の喧嘩は。殺人はわがみの客の傳兵衛殿なれど。大恩受けた久八といふ者が。代りに捕られて往つたげなが。其場に落ちてあつた小柄が。カノ傳兵衛殿がお屋敷から。拜領した小柄ぢやゆゑ。天命通れず御詮議最中。なれども其夜から傳兵衛の行方も知れず。其相方の女郎はおしゆんといふ事お上にもよう御存じで。親方の方へも色々御詮議があれど。是も行方が知れぬと言ひ切つて。今探めである最中ぢやと。とりくの噂評判。おりやもう聞きたびにびくくすると。地聞くほど迫る。ッおしゆんが胸。其夜の起りも皆わしゆゑ。何處にどうしてござるやら。地心もとなさ逢ひたさも。

いふに言はれぬ此場の品。ッしいかと胸も塞がりし。地母は一途に娘の可愛さ。コレおしゆん。何にも案じる事はない。併し突詰めた男氣で。ひよつと此方の家へ来て。双物三味でもしやせまいかと。四五日は夜の目もろくに。寝られぬまの物業じ。地世間にたんとある格な心中やなどしてくれたら。此母は目かいは見えず。兄はアレあのやうな臆病者。もしもの事があつたらば跡で母はどうせうぞ。袖乞物もらひに歩いてもそりやもうひつとつも厭やせぬけれど。そなたの體に凶事でもあつたら。おりやもう直に死んで仕舞ふぞや。若い氣に前後思はず。義理ぢやイヤ人の落目を見捨ててはと。つまらぬ義理を立てぬいて年寄の此婆に。つらい目見せてたもんなやと。可愛さ餘る親心。ア、南無阿彌陀佛も。ッ涙

今母の言はるゝ通り。何の義理もへちまもいらぬ。退いてしまへば赤の他人。またおれも氣にかゝつて。好の飯さへ喉へ通らぬ。母じや人の氣休め。俺が腹助ぢやと思つて。退いてたも。や。や。頼むく。と正直一遍。母の心と兄の言葉。勿體ないと思へども。切るに切られぬ胸のうち。所詮死なねばならぬ身の。此場を脱けて其上でと。ッ心一つに思案を極め。母さん兄様。お二人のお言葉より合點致しました。地殊に又傳兵衛様。つい一通りで逢うた客。深い。人の落目を見捨ててを。廓の恥辱とするわいな。逆も末のつまらぬ事。わしや得心をさせまして。品よう譚の立つやち。イヤく其やうに譚立てると言やつても。あつちに得心せぬ時は。それく往にがけの駄賃馬で踏殺し。ア、イヤく

無理殺しにしようもしれぬ。コリヤ滅多に噴合はされぬ。ヲ、兄の言やるとほりぢや。そなたに怪我でもあつては。傳兵衛殿とやらも難儀。思ひ切るのがあつちの爲。わがみに心引かされては。つい捕へられるは知れた事。退状を遣つたらそなたの事も思ひ切つて。切れるとも。遠い國へでも影を隠したら。身を遁れまゐるものでもない。ソレ／＼むつかしかるとも一筆。兄硯箱取つてやりや。サ、早う。地／＼と母と兄。言葉にいなもなき顔。隠す硯の海山と。重なる。思ひ延紙に。筆の立所の後や前。涙に墨のにじみがちなる。胸のうち。地書き遺すとはつゆ知らぬ。與次郎が傍から。詞コレ。其やうに長たらしう書かずとも。つい退きますと書いても。濟みさうな事ぢや。イヤナウ。書いたものはあと／＼まで残る物。男の去狀と同じ事。とつくりと譯

の分るやうに書いてやるがよいぞや。ア、此狀にとつくりと。御合點の行くやうに。兄様。此文お前から。お渡しなされて。よし／＼。此狀さへあれば千人力ぢや。マア／＼。母じや人も落着かしやれ。とやかう言ふ内九ツ前。お前も奥でもう寝やしやんせ。ソレ／＼。今夜こそゆつくりと。心よう寝るのである。兄もそなたも其處に寝やと。地奥底もなき隔てをば。押明けてこそ入りにける。詞サアおしゆんこちらもこゝに往生いたそ。アイと地おしゆんが共々に。暫し此世を假蒲團。々々薄き親子の契やと。枕に傳ふ露涙。夢の浮世と諦めて。ナホスギンオク更けゆくへ鐘も哀れ添ふ。地頃しも師走十五夜の。月は冴ゆれど胸の間。過ぎし別れの言ひかはし。死なば一所と傳兵衛が。忍ぶ姿のしよんぼりと。イむ軒は見覚えの。櫓かにこゝと門の戸へ。障る相

圖の咳拂ひ。聞くにおしゆんは飛立つ思ひ。上る枕もうちはづす。ツシ與次郎は傍に高駈。地心も共に行燈の。ともしび吹き消しさし足にハズミ心。急くほど明きかぬる。戸口の鏢表にも。詞おしゆんぢやないか。傳兵衛様よう逢ひに來て下さんしたと。地いふ聲寝耳に與次郎が胸り。起きると明ける門の口妹が姿も暗粉れ。捉へる袖の振合せおしゆんと心得傳兵衛を。無理に引きこむ取り違へ。戸口を内からびつしやりと引立て。詞ソレヤこそ突きに來をつたぞ。おしゆん必ず外へ出まいぞや。戸口に俺が押へてゐる。門にゐるは傳兵衛ぢや。おのれを入れてよいものかと。ツシ言ふもがた／＼詞廢ひ。詞コレナア兄様。わしや表にゐるわいな。何ぢや表にゐるわいな。ヤア其聲色おいてくれ。そんな事喰ふおれぢやないわい。母じや人／＼。傳兵衛がおしゆ

んを殺しに來たゆゑ。今表へ立て出した。
おれ一人では手が廻らぬ。こなたも加勢
して下され。加勢くくと。地うろう
ろくく。うしろたへ騒ぎ。地母親も。
何何ちや傳兵衛の加勢。ム、まだ外に同
類でもあるのかと。地探り寄つたる傳兵
衛がそば。コレくおしゆん。頼ふ事は
ない。兄や母が付いてゐる。マア氣も鎮
めやと撫でさする。背中の手障り合點ゆ
かず。コレく與次郎。どうやらコリ
ヤ娘ではないやうな。ヤア間がり紛れに
材木が紛りやせぬか。此方つかまへて居
て下されやと。地探る手先に火打箱。が
ちく震ふ。フシ付木の光り。コレコリヤ
妹ぢやない傳兵衛ぢや。おふくら兄御。
エ、面目もない此姿と。地猶も小隅にフシ
屈みゐる。コレコリヤヤイ其やうにしをし
をして見せて。おいらを欺して。おしゆ
んを突かうとするのか。其手は喰はぬと。

地懷より一通取り出し。怖々ながら傍に
寄り。コリヤ傳兵衛。おしゆんと汝と手
が切れぬと。科人の汝ぢやによつて。妹
まで難儀する。それでさつきに。妹に得
心さして。退狀が書かしてある。コレは
を見い。これぢやによつてモウくく。
おしゆんが方に殘心氣は離れてあるわ
い。ム、スリヤお俊がその退狀を。コ
リヤどき狀ぢやく。エ、その心とは知
らず。いひかはした詞を誠と思つて。迷
うて來たが無念なわい。地口惜しいと齒
を喰ひしばる男泣き。恨を聞くも隔たる
戸口。心はさうぢやないじやくり。コレ
ヲさぞ腹が立と道理ぢやく。マアとつ
くりと氣を鎮めて退狀を見て下さんせ。
ヲ、それでよい。長う物言やんな肩が出
るぞ。傳兵衛。おれが讀むで聞かしたう
ても。皆目おれは祐筆ぢや。サアく。
地早うと封じめ切り。突付けられて目に

たまる。涙を拂ひ。コレナニ書置の事。ヤ
アなんぢや書置。コレく兄正直な。吃
驚する事はない。そなたは無筆私は盲者。
書置ぢやと讀違へ。狼狽して門へ出で。
娘を存分にせうとの工み。そんな虚言は
喰ひませぬ。サアくほんまに讀まつし
やれ。コレく與次郎。表の娘に氣を付
けて。門の戸を明きやんなや。ヲ、吞込
んでゐる。こゝにはおれがへたばり付い
てゐる。サア早う讀め。物こそはよう書
かね。聞く事は無筆ぢやないわい。サア
く。讀んだく。これまでの御養育。
海山にも譬へ難き親の御恩。殊更不自由
なるお身の上何とぞ首尾よう勤を遁れ。
世を樂に過ごさせまじ候はゞ。せめて少
し御恩報じ。孝行の片端にもなり候はん
とそれのみ朝夕祈りく處。二世までと
いひ交し。傳兵衛様。思はず此度の御
身の難も皆我ゆゑに候へば。今更見てゐ

候ては女の道立ち申さず候。不孝とは思ひながら共に覺悟を極め、母じや人どうやら風が變つて來た様な。サイナウ。わしも胸がどきどきと。サア、あとを讀んで下され。先ほど傳兵衛様退狀と申して認めしは。此事申し上げたきま、退狀と偽り書遣し、何事も、前世よりの定まり事と御諦め下され候。申上げたき數々は筆にも盡しがたく候へども。心せくまゝ申し入れ、扱はさうした心かと。驚く傳兵衛親子はうろろる。エ、氣遣ひなコレ兄や。娘を内へ早う。地、と母があれれば與次郎も。戸口を明くれば走り行く。妹を無理に四人が顔見合して溜息つき。涙に更に別ちなく。地、なんと言葉も傳兵衛が泣く目を拭ひ。阿、一旦言ひかはした言葉を立て。共に死なうと覺悟して。義理を立てぬくそなたの貞節。忘れはせぬ嬉しいぞや。地

思ひ廻せば廻す程。我こそ死なで叶はぬ身。そなたは科のない身の上。共に死んではお二人の歎き。命ながらへ亡き跡の。とひ弔ひを頼むぞと。言葉にはつと泣出し。そりや聞えませぬ傳兵衛様。お言葉無理とは。思はねどそも逢ひかゝる始めより。末のすゑまで言ひ交し。互に胸を明かし合ひ。何の遠慮もないしうの。世話しられても恩に被ぬ。ほんの女夫と思ふ物大事の。大事の夫の難儀。命の際に振捨て、女の道が立つものか。不孝とも悪人とも。思ひ諦めコレ申し。一所に死なして下さんせと。隠せし剃刀取直す。阿、マ、マア待て待ちをれやい。是で死ぬると命が無いぞよ。コリヤ何の事ぢやんと分からねぬやうになつて來たわい。殺しに來たと思うた傳兵衛殿より。今ではわれが方が手強うなつたぞよ。コリヤマアどうしたらよからうぞと。地、いふも

おろく母親も。阿、さうぢや。我が子が可愛いと。子ゆゑの闇の傍ひら見す。これまでおしゆんがお世話になつた恩も義理も辨へず。一途に中を引分けうと思うた母は義理知らず。地、賤しい勤する身でも女の道を立て通す。娘の手前面目ない。そなたの心に恥入つて何事も言ひませぬ。傳兵衛様と一所にの。コレ死出の道運しやいなう。したがコレ申し傳兵衛様。定めて親御様たちもござりませうが。親の心といふものは人間はおろか。譬へ鳥類畜類でも。子の可愛さに變りは無いもの。おしゆん傳兵衛と言はす氣か。もしやお前が死なしやつたと親御たちが聞かしやつたら。悲しうて、此世に殘つてゐる氣はあるまい。何國いかなる國の果。山の奥にも身を忍び。どうぞ遁れて下りませ。娘が心に恥入つて天にも地にも掛け替ない。可愛い我が子を

心中に合點あてしてやる親心。こゝの道理を
 聞き分けて。コレ拜みます。頼みますと
 手を合したる母親の。子ゆゑに迷ふ闇の
 闇。二人は何と言葉さへ涙に涙結ぼるゝ。
 血筋の別れ與次郎も涙の雨の古布子袖く
 ひしばりフシしやくり泣き。地ア、傳兵衛
 様の歎かしやるも道理ぢや。又おしゆん
 の泣きやるも道理ぢや。母じや人の泣か
 しやるのも猶道理ぢや。道理ぢや〜。
 道理々々というては根から葉から。何時
 までも分からね道理ぢや。ガコレ二人な
 がら母じや人の今の言葉。御合點が参り
 ましたか。エ、コリヤ。われも得心して
 くれたか。合點がいたか。サ、合點
 したらば。どうぞ此場を立退く分別。し
 かし其形かたちでは人目に立つ。京の町を離れ
 るまで。此編笠このへちまに顔隠し幸ひの猿廻し。
 まめで二人が末永う。めでたう女夫にな
 り遂げる。門出の祝ひに此與次郎がおは

つ徳兵衛が祝言の壽ことば。こなた衆も別れ
 の盃。イヤ〜祝言の盃と。地祝ひ唄ふ
 かいな。コレ、徳兵衛様ござんせ。餘り
 こな様が来やうが遅いによつて。おはつ



も聲低こゝろに。有田歌お猿はめでたやな。合點手
 婿入姿ものつしりと〜。コレさりと
 は〜地ナウあるかいな。さんな又ある
 様は顔真赤にして腹立てゝゐやんすわい
 なう。コレお初様。聖様が盃をしたいと
 いなう。機嫌直して盃を戴かんせ。コレ

コレ、増載くなら盃を。さんな又ある
かいな。阿ヤ、コレむこ様。足で盃をさ
す餘りつれない。それでは嫁御が戴かん
せぬわいなう。ひぞらずとほんまに差し
てやらんせ。さうぢや。そこでお初
が戴いた物ぢや。地コレ戴くう盃を。
さんな又あるかいな。拙手コレ嫁御の盃
寝もころりとせい。ナ。コレ。エあ
るかいな。さんな又あるかいな。コレ
婿様餘りつれなうさんすによつて。おし
ゆんよめ御様が起きさんせぬわいなう。
そこらでちよつと起したり。コレ。エコ
リヤコリヤヤイコリヤ。さりととはさりと
は地ナウあるかいな。さんな又あるかい
な。拙手起きたら互ひに抱き付きやれ。
ヲ、それで機嫌が直つたぞ。地エ、
あるかいな。さんな又あるかいな。會
くるりと返つて立つたりな。立つてくれ
コレ、立たしやませ。序に日和を

見たもれよい女房ぢやに。ナウ
あるかいな。さんなまたあるかいな。拙
日より見たらば落ちてたも。コレ
さうぢや。地おさるはめでたやめで
たやな。阿サア、きり、此家を。さ
るまはし。まさるめでたう何時迄も。命
全うしたもと。目は見えぬども。見送
る母。言葉も此世で聞きをさめ。心の中
の暇乞あすの噂と。なりふりも憂す。姿
の女夫連。名を繪草紙に聖護院森を。あ
てどに。三度辿り行く

下之卷 道行涙のあみ笠

ニエリ歌なまなかに染めて眞紅の纏れ糸。
結ばれしより白米の。昔をナメス忍ぶ。
世の憂さや。今は浮名も。たちばなの。
花の姿も。メエいつしかに。萎れがちな
目にもろき。露の命と消えに行く。深き
契りの傳兵衛は。おしゆんを連れてをち

こちのたつきも知らぬ夜の道。あとやさ
きなる纏れ髪。むすばれそめし縁のはし
人目を包む。網笠に。姿は變し變れども。
心の誓紙いつまでも變らじものと手を取
りて。心細くもたど二人。半太ハルッテ
ぎし廓のきぬに。送られしとは引替
へて。我ゆゑかゝる。フッ身となりて。
半中サハリ。智慧も器量も身代も。みな淡雲
と消失せて。かはせし言のかずくに。
切るにきられぬ中々に。しがらむ。縁の
いとしやと。いへば傳兵衛身を悔み。人々
の氣やすめと。猿廻しと姿を變へ。堀川
を落ちては來たれども。人を殺した我が
身の上。存へる心は無い其方は後に生殘
り。母御へ孝行盡したも。往んでたも。
コレ傳兵衛さんそりや胸欲な。氣の悪い。
かゝさんや兄さんにも。替へぬお前を先
立て。生きて居さうな。わたしぢやと
思うてかいな愚痴なぞえ。死なば一所と

いひながら。世にも尊き靈場の。森の中にテナキ死ぬるなら。回向の數に後の世の闇も。照さんビロヒこなたへと。手を引き立てて行く空の。星も逢ふ潮の。天の川。それにはあらで織女の錦の小路綾もなく。セツリ過ぎる向ひにちら／＼と。

見ゆる火影は。誓願寺。嵐にさゆる。鐘の聲なま。いだなむあみだ。無世は定めなや去年の秋。闇の隙間の。小夜嵐。ナキア、よい月と。フシ眺めてし今宵は二人月影も。面恥かし此姿。キ太ハテシわたしもとは。突出しのふと逢ひそめし戀の種エ、儘ならぬ浮世ぞや。おいとしい此姿。わしといふもの無いならばお内儀さんと呼迎へ。仲よう添うてござんしよと思ひ廻せば。フシ勿體ない。誓文わたしや来でもあなたを退けて浮氣はない。二世も三世も其先までも。どうした因果の縁ぢややら。堪忍してとばかりにてわつと

ひれ伏し。フシ泣沈む。ユリニクシ露の横顔吹きかはし。帯のしやら解け引締めて。本フシよしや敷かじ色ゆゑの。憂さもつらさも。猿廻し有歌おさるはめでたやな。合子婿入り姿のつしりと／＼。アコレさりと／＼。地ナウあるかいな。さんなまたあるかいな。又とあるまい二人が中。

涙耕す畑道。合にげ来る一人。合追ひくる二人。合挑みあらそふ人影の。合夜の目。にそれと小さうも。さだかに見えぬ霧の中。見えつ。隠れつ。フシかくれなき。二人が中は櫻木に。鎌められて唄はれて。色の譯しり戀しりと。キキカ、リ仇名残すが亡きあともでも。ほんにせめての思ひ出と。へ慰められつ。なぐさめつ。行くも涙の道もせや。二人が命はかなくも森の。こなたに着きにける。

聖護院の段

地こなたの畑道いつさんに逃げ来る勘藏其跡より。同じく走つて万八も。吐息つはしたる瀧口左内め。アノ又井筒屋の。手代十助めも力強。なか／＼手に合ふ奴等ではない。ヲ、サ／＼何でもおしゆん傳兵衛二人の奴ら。引捕へてくれんと。思ひの外の今宵の時宜。さて／＼ひどい目に逢うた。イヤもう此万八が。體は大

方粉になつた。よもや此處まで追つかけても來はせまい。捉へられてはむつかしい。地マア息休めと芝の上。へたばる後の桶の陰より。すつと出でたる手代十助。隠せし提灯差揚ぐれば。吃驚しながら顔打眺め。アヤおのれは手代の十助ぢやな。ヲ、二人とも動くまい。最前惜しい所を取逃して。これまで跡追はへて來た。此處で逢うたが百年目。傳兵衛様の難儀も質金も。おのれらが皆仕業。片つばし

引縛つて。ぐつと詮議を仕抜くのぢや。
ホ、ウ斯うなるからは。此方も死にも
狂ひ。それ万八。ヲ、心得た。もうやけ
むちやに締殺せ。してこいと。右と左に
万八勘藏武者ぶりつくを。アリ心得二人
を小手がへし。又組付くをすくひ投げ。
提灯消えて。地ヨリ眞闇がり。どれがど
れやら當どなく聲を。しるべに掴みつき。
投げつけられ根競べ。逃ぐれば追つか
け追戻し。堤をすべつてころ〜。〜
落ちては上り上れば落ち。命限りと。三重
へ掴み合ふ。フシ斯くとも下より。弓張提
灯。火影にすかして。ヤア十藏。阿左内
が来た氣遣ひない。いふ聲聞いて驚く
万八。落ち散る雪駄かい握み。提灯へ。
ばつたり當てれば火は消えて。俄に闇の
心地する。島を傳うて逃げ出す一人。何
國迄もと。ユリ三重へ追駆くる。地こなたの
森はしん〜と。傳兵衛は傍へに座をし

め。阿サアこれが我々が。露の命の捨て
どころ。書置く事も言ふ事も。もう此段
には皆練言。二人手に手を取りかはし。
死出三途を伴はん。心強く死んでたもと。
地涙ながらに勸むれば。お俊も涙に。フシ
聲盛り。阿嫁しうござんす傳兵衛さん。
夫があゝの世の樂みぞ。もう今生のいひを
さめ。女房おしゆんと唯一言。いうて殺
して下さんせ。わたしもこちの旦那どの。
傳兵衛さんと地いふわいなと。ヌエ膝に
凭れて泣きくどく。阿ア、愚な事ばかり。
逢初めた其晩から。互にほんの女夫ぢや
と。約束したに違ひはない。斯く成り果
つると知らずして。我が命を助けんと。
久八が身に覺えなき人殺しとなつての。
獄舎の住まひ。憂き苦しみ。親人にお歎
かけ。現世の罪に罪重ね。來世の苦患も
恐ろしい。親の御恩を忘れぬため。地家
の定紋の小袖は血沙に汚さじと。阿家と

ある傍へに直し置き。阿サア夜が明け
ては恥の上塗り。この傳兵衛を御不便が
餘つてより。そなたを請出し添はせんと
の。親人の御情。思ひがけなく其晩に。
事を仕出せし河原の喧嘩。詮方なさに。
官左衛門を斬殺したる身の災難。不孝に
不孝重ねたる我が身の上。是まで不孝の
詫言や。暇乞には拜むばかり。そなたも
堀川の親兄へ。暇乞して禮言やと。地心
を付けられ身を震し。地エ、忘れて居た
ものを。ひよんな事いひ出して。また泣
して下さんすか。背に別れて出るまでも。
いかなる國の果。山の奥にも身を忍び。
どうぞ通れて夫婦となり。無事で暮せと
かゝ様の。地の給ひしに。明日は死んだ
と沙汰あらば。さぞや母様兄さんの。歎
き給はん。お命も續くまいと。案じられ。
それが悲しい〜とわつと。ヌエカリばか
りに取亂し。フシ前後正體なかりしが。地

やうく涙押鎮め。目アレくあれは向うの赤いは夜の明けるのぢやないかいな。イヤくあれは在の墓所。亡者を葬る火の光。同じ人と生れても。疊の上で死んだ身は。あとのあとまであの様に。葬らるゝもあるものを。都の中でも指折の。町人の子が洩ましい。見苦しう。死んだ體を巷に曝され。あとくまでも。恥をさらしのながら川。地水の流といひながら。人間の身は船に似て。心の船長柁取の。悪いばかりで末の世まで。因果の業を果さぬかと。悔み歎けば。諸共に抱き合うたるも涙。ッシ森の落葉や。浸すらん。はや明がたの鶏のこゑ。キキこには無常の使かと。心せかれて死用意。ナホスシとくりく急ぐ其所へ。地一文字に駆け来る與次郎。南無三寶と逃出すを。兩手に取り付き殺さぬくもう殺さぬぞ。斯うあらうと思ふたゆゑ。方々と尋

ね歩行いた様子があるといふ聲も息切れしたる後より瀧口左内喜左衛門を同道し勘藏万八に繩をかけ十助に引立てさせヤア早まるまいく兩人横瀧官左衛門は役柄にて自由を働きはまで殿の御用金を掠め遣ひ多くの御金を引負ひしたる條明白に死後に露顯に及び不届たる旨お咎め強く彼奴は死にぞん殺しどく是なる万八勘藏も彼が手さきを働き贖金まで遣ひし仔細悪事の段々一々白状彼等を直に代官所へ引渡し。久八が出牢を願ふばかり。地安堵せよ傳兵衛と。言葉の中より喜左衛門。目おしゆんは直に身請して波風もなぐ事すんで。治まる家の花嫁と呼迎へん。喜べと。地聞いて皆々勇み立ち。親のお慈悲とありがた涙。嬉し涙にッシヤリ喜びをかさね重ねる。千代八千代。羽を伸す。鶴や龜山に。音は絶えせぬ瀧口が。仁あり義あり道を立て。運も開くる傳兵

衛おしゆん。昔に還る其噂。目出たき末の代々までも筆に任せて書き残す

右此淨瑠璃は天明二の春豊竹八重太夫中の芝居へ下り御目見え出語大賞仕候得共正本出不申依之此度つたなき筆をもつて上中下三段に綴り四方の貴客の御一笑に備ふのみ

天明五乙巳年九月九日

中村重助再撰